

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

ホームページ

<http://shakatsushin.cool.coocan.jp/>

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

e-mail: shakatsushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目一八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話/FAX(03)3299-5367
振替 0010019158431 労金 中央労金本店 No.1154163

購読料 月額 (郵送) 350円・メール 175円)

6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

職場活動をはじめよう

杉森 弘之……2

何から始めるか

■フィデルの寄稿■

米国からの贈り物は必要ない

訳 富山 栄子……3

兄弟オバマのキューバ訪問について

輪作破壊で十勝農業崩壊も

佐野 周二……6

—TPPと北海道農業—

マルクスと向坂逸郎と梅原猛

原 野人……8

新書紹介『新幹線開発百年史』『運転室の安全管理』

袁輪 泰臣……11

読者からのおたより……

12

旬刊 社会通信

NO. 1215

二〇一六年五月一日号

二〇一六年五月一日発行
(毎月一日・二五日二回発行)

職場活動をはじめよう

何から始めるか

茨城ユニオンは先の定期大会で、新期の重点課題として「職場活動を強化する」ことを参加者全員で確認しました。職場活動を強化するとは、職場での組合活動を強化するということです。

これまでの茨城ユニオンの活動は、団交にしても、抗議活動・宣伝活動にしても、あるいは労働委員会や裁判所などにしても、職場外での活動が主でした。逆に言えば、職場での組合活動が軽視される傾向がありました。

分会のある職場では一定の組合活動が行われているところもありますが、それでも職場活動としては十分ではなく、ほとんど取り組まれていない職場も少なくありません。分会が組織されず、組合員が一人ないし二人の職場では、ほとんどが職場活動を取り組んできませんでした。そのため、総じて「眠っている」分会・組合員が多く存在してきました。

それでは、なぜ職場活動の強化が必要なのでしょう。

第1に、職場の組合活動がなければ、職場の労働条件の改善は望めないからです。組合員でいるだけでは、経営者が改善してくれるものではありません。労働条件の改善を具体的に要求していくことが、必要なのです。

第2に、職場の組合活動が、解雇・不当配転・差別的取扱いなどから身を守る基盤となるからです。組合活動をしていなければ、組合員であることを根拠にした不当労働行為として反撃する基盤を弱めることになります。

経営側は組合員であるからではないと弁明しますが、日常的な組合活動は不当労働行為禁止という反撃の基盤を強めるものです。

第3に、職場の組合活動が、組合員の拡大につながる可能性を広げるからです。組合活動がなければ、職場の他の労働者は組合の存在すら知らない、あるいはほとんど知りません。何かあっても組合に相談したり組合に入ろうとしないでしょう。組合員の拡大は確実に組合の力の強化につながります。組合員の拡大を意識し、職場の組合活動に取組んでいく必要があります。

職場の組合活動は、分会がある職場ではもちろん、職場に組合員が一人や少数でも、取り組む必要があります。職場に組合員が一人や少数でも、すでに団交などで公然化している組合員がほとんどです。こちらは何も考えていなくても、経営側は常に組合員としてみていることを意識する必要があります。

職場の組合活動は、何から始めたらいののでしょうか。

団交で、掲示板の設置要求をすることが第一歩となります。掲示板で組合の結成や活動、要求事項などを明らかにすることで、組合に対する職場での意識を高めるとともに、経営側への圧力ともなります。特に新入組合員の最初の団交の場合には、組合の結成を通知するわけでもありませんから、組合掲示板の設置要求も含めることです。

必要に応じてチラシ配布も行います。(本部は教宣部を強化し対応し、掲示板ニュースの定期発行やチラシ配布を援助できる態勢の整備が必要です。)

次に、職場改善のための要求事項を整理し団体交渉・要求活動を行うことです。(要求事項については本部が担当者を配置し、相談に乗れるようにし、団交も応援できるようにすることが必要です。)団交は改めて一回行うことです。その経験を踏まえて、年に何度か、さらに必要に応じて団交・要求を行うようにしていきましょう。

(茨城県牛久市議 杉森 弘之)

フィデルの寄稿

米国からの贈り物は必要ない

兄弟オバマのキューバ訪問について

歴代のスペイン王はアメリカ大陸に征服者と支配者を持ち込んだ。こうした人々の足跡が円形をした牧地に残っている。そうした土地は川砂から金を探す者たちに割り当てられていたが、砂金採掘は破壊的かつ恥ずべき形態である。その跡は国中のここかしこにあり、上空から観察できる。

今日の観光は、だいたいキューバの美しい景観を見せ、この上なく美味な海産物を味わってもらおうというものだ。観光業は通常、大規模民間外資との合弁形態をとっており、利益は数十億ドルまでは達していないが、一人当たりで見れば注意を払うほど大きいわけではない。

歴史的瞬間の一つの特徴

さて、一つ問題を話さなければならない、とくに青年たちに対してと思ったので追記する。人類史の今のこの瞬間、ほとんどの人がこの瞬間の条件の重要性に気づいていないということである。時間がないとは言わないが、ためらわずに言う。危機的状況に直面している現実に対処するために私たちが持つていなければならない知識と意識について、私たちも、そしてあなた方も、十分に知らされていないということだ。まず考慮しなければならないことは、私たちの一生は歴史の一瞬間でしかなく、さらに人類全体の絶対的必要性と共存していなければならないということだ。この歴史的瞬間の条件の一つの特徴は、自らの役割の過大評価という傾向の一方で、もっとも崇高な夢を体現した無数の人たちがいるということである。

ホセ・マルティイそして革命家たち

だれも一人としてその人自身が、いい人、悪い人というのではない。私たちのうちだれ一人として、革命的社会で果たさなければならない役割のためには作られていない。キューバ人の場合にはある程度、特権でホセ・マルティイ(= Jose Marti)の模範例に習った。マルティイが「まさに今が私にとつての時だ」と言って、列を組んで銃を構え、塹壕に身を隠したスペイン軍に突進したとき、ドス・リオスで戦死しなければならなかったのか、そうしてはならなかったのか、とさえ自問している。

マルティイは米国に戻りたいとは思わなかったし、マルティイにそうさせる人もいなか

った。だれかがマルティの日記帳の何ページかを破いた。この裏切り行為の責任はだれにあったのか？ 疑いなく策略に長けた陰謀家の仕業だった。指導者たちの間の立場の違いは知られているが、決して規律が乱れていたのではなかった。栄えある黒人指導者アントニオ・マセオ（＝Antonio Maceo）は「キューバを支配しようとする者はだれも、戦死しないのであれば、血のしみ込んだ土埃を集めることになる」と述べた。マクシモ・ゴメス（＝Maximo Gomez）も同様に、わが歴史上でもっとも気高い規律をもち、思慮深い軍事指導者と認められている。

もう一つの視点から見れば、ボニファシオ・ビルネ（＝Bonifacio Byrne）の怒りを称賛しないわけにはいかない。彼はキューバに戻る船から一つ星の旗と並んで別の旗があるのを遠くから見て、「私の旗は決して傭兵ではなかったほうの旗だ」と言い、これまでに私が聞いたこともないような美しい言葉で、すぐさま付け加えた。「旗がぼろぼろに裂けても、いつの日かそれは私の旗になる。……倒れても、両腕を高く挙げたまま旗を守っていける！」と。

私はカミロ・シエンフエゴス（＝Camilo Cienfuegos）の火のついたような言葉も忘れることはできない。あの晩、米国製バズーカと機関銃を手にした反革命分子たちがわずかに数十メートル離れたところで、われわれが立っていたテラスに狙いを定めていたのだった。オバマは自らも言ったように一九六一年八月生まれだ。以来、半世紀以上が過ぎた。

オバマの妄想

それでは、キューバを訪問した賓客が今日、どう考えているのかを見ようと思う。

「私は、冷戦時代にアメリカ大陸に残された最後の痕跡を消すためにやって来ました。キューバ国民に友情の手を差し伸べながら来ました。」と言った。

直後、われわれの大半にとってまったく新奇な概念が洪水のように続いた。

「われわれ両国民はヨーロッパ人に植民地化された新大陸に住んでいます。」

オバマ大統領は「キューバは米国と同じく、アフリカから連れてこられた奴隷で構成されています。キューバ国民は米国民と同じく奴隷と奴隷主の先祖をもっています。」と続けた。

オバマの頭の中には先住民がまったく入っていない。革命が人種差別を払拭させたことも言わない。キューバではバラク・オバマ氏が十歳になる前に革命によってすべての人に年金と賃金が与えられたことも言わない。キューバ革命で、レクリエーション施設から黒人市民を放り出す用心棒を雇うという憎むべき、人種偏見ブルジョア慣習は一掃された。このことはアパルトヘイト反対の戦闘を通じてアンゴラを解放し、一〇億人以上が暮らすあの大陸にあった核兵器の存在に終止符を打った歴史に引き継がれることになった。それがキューバの連帯目的ではなかった。連帯の目的はアンゴラ、モザンビーク、ギニア・ビサウなどポルトガルのファシシヨ的植民地支配下にあった国々の諸国民を助けることだった。

一九六一年、革命勝利からちょうど二年三カ月後、火砲と歩兵部隊を備え、訓練された傭兵部隊が航空機の支援を受け、米戦艦と空母をとらなつてキューバを奇襲攻撃した。わが国に死傷者数百人をもたらした周到に準備した攻撃は何をもつても正当化できない。親米攻撃部隊から、いかなるところであれ、ただの一人の傭兵であれ、救出できたということとは成立しない。国連では米戦艦がキューバ反乱軍のものとして説明されていた。

南アフリカのエピソード

米国の軍事面での経験と権力は熟知されている。アフリカでも同様に革命キューバを闘争から容易に叩きだせると信じられていた。人種主義者南アフリカ機動部隊によるアンゴラ南部からの攻撃は首都ルアンダ付近まで迫っていた。ここから闘争が始まり、一五年を下回らない年月の間続いた。ハバナのアリシア・アロンソ劇場でのオバマ演説に対する基本的義務が私にはないとするなら、このことは話さないだろう。

だから詳細を話すつもりはない。ただ、アンゴラで人間解放のための名誉ある闘いの一章が書かれたことを強調したい。確かにオバマの行動が正しくあつてほしいと私は願っていた。その貧しい出身と生来の知性は明白である。マンデラは終身刑であったが、人間の尊厳への闘争で巨人になった。ある日、マンデラの生涯のある部分を書いた一冊の本が私のところへ届いた。驚いた。バラク・オバマが序文を書いていた。私は急いでじっくりと読んだ。マンデラは信じがたいほど細かい文字でデータを正確に筆記していた。彼のような人たちを知ったことは価値あることだった。

南アフリカのエピソードについて、別の経験を指摘しなければと思う。南アフリカ人が、どのようにして核兵器を獲得したのか、その形態についてもっと知りたいと思は思っていた。持っている情報で確かなのは一〇―一二発を超えないほどの爆弾というだけである。信頼できる情報源はピエロ・グレイジェセス（＝Piero Gleijeses）教授かつ研究者のものである。彼は優れた書籍「紛糾する使命：ハバナ、ワシントン、そしてアフリカ 一九五九―一九七六」を執筆した。

私は教授が経緯についてもっとも信頼できる情報源だということを知っていたので連絡した。教授は、当時の駐アンゴラ・キューバ大使であり、協力者であり、教授の良い友人でもあったホルヘ・リスケ（Jorge Risquet）同志の質問に論文で答えてあるのでこの問題についてはこれ以上話してはいないと回答してきた。

リスケの所在がわかった。リスケは別の重要な職務での一定期間のコースを終えるところで、あと何週間が残っていた。この任務はつい最近のピエロのキューバ訪問とちよほど重なった。リスケは高齢で健康状態が優れているわけではないとピエロには言っておいたが、その数日後、恐れていたことが起きた。

容態が悪化し、リスケは亡くなった。ピエロが到着したとき、私は約束することしかできなかったが、核兵器および人種主義南アフリカがレーガンの米とイスラエルから支援を受けていたという関連情報の入手はできていた。

私はオバマが南アの経緯について今、何を言わなければならぬかについてはわからない。まったく何も知らないということはあり得ないが、何を知っていて、何を知らないかには目をつぶる。控えめに進言するが、キューバの政治に関する理論を今は考察するだけにとどめ、詳しくは述べないようにするのがよいと思う。

栄光、諸権利、精神的豊かさ

重要な問題がある。オバマは演説したが、その表現に最大限の甘ったるい言葉を使っている。「今は過去を忘れる時です。過去から立ち去り、将来を見ましよう。希望ある将来をいっしょに見ましよう。それは容易ではないでしょう。困難もあるでしょう、時間をかけていきましょう。しかし、今回の滞在は、友人として、家族として、隣人としてともに何ができるかについて私により大きな希望を与えています。」

こんな言葉を米大統領から聞いたら、どのキューバ人も一人ひとり、心臓麻痺を起こしそうになったかもしれないと思われる。ほぼ六〇年続いている容赦ない封鎖政策に続いて、キューバの船舶や港での傭兵による攻撃、満員の旅客機の飛行中の爆破、傭兵の軍事侵攻、無数の暴力行為・軍事的行為の中で死んだ人々はどうするのか？

高貴で、私心のない献身的な国、キューバの国民が教育、科学、文化の発展を通じて獲得した栄光、諸権利、精神的豊かさを放棄するだろうという幻想をだれであれ、抱いてはならない。

われわれキューバ人は必要な食料、物質的豊かさを国民自らの努力と知性をもって生産することができるかと重ねて警告しておく。この帝国がわれわれに何かをくれる必要はない。われわれの努力は今後も合法的であり、平和的である。なぜなら、それは平和と地球上に住むすべての人間の兄弟的關係に対するわれわれの約束になっているからである。(フィデル・カストロ・ルス二〇一六年三月二七日午後一〇時二五分)

(訳 富山 栄子)

輪作破壊で十勝農業崩壊も

― T P P と北海道農業 ―

国会審議 安倍政治・財界は「攻めの農業・輸出拡大」を宣伝(「十勝川西長いも」など)、T P P (環太平洋経済連携協定)「大筋合意」ありきの姿勢である。農林水産省の説明会が札幌、釧路、北見、帯広など六カ所で開かれたが、負の影響を知らせていない。農業対策をやるから農家、農業者は諦めろと言わんばかりだ。

「国会決議で守るとした重要五農産物で、なぜ三割もの品目の関税が撤廃されたのか」、後半国会の焦点、T P P 法案が衆議院本会議で審議入りした。政府・与党はT P P を成長戦略の柱として五月下旬までに成立させる構えだが、野党は国内農業への打撃を指摘し、五日の特別委員会で提出された交渉記録の大半が黒塗りに猛反発、参議院選挙をにらんだ波乱の幕開けとなっている。

野党側は口利き疑惑(政治と金)の甘利明前経産相(前T P P 担当)の参考人招致を求めている。交渉を主導した甘利明・前T P P 担当相とフロマン米通商代表との秘

密協議を明らかにさせるため当然だが、安倍政権は頑なに拒否している。

TPP衆議院特別委員会（西川公也委員長）は八日、紛糾、質疑中断した。西川氏が五月に出版予定のTPPに関する著書について、官僚が交渉経緯の情報を提供したのではないか？ 交渉経過を「秘密保護の対策」とする政府の姿勢と矛盾すると野党は抗議している。

拡がる不安 TPPの最大の争点は、日本が関税交渉で「聖域」とされた米・麦・牛・豚肉、乳製品、甘味資源作物の農産品重要五項目のTPP大筋合意の扱いだ。コメの関税は守ったと言いながら、米国、オーストラリア向けに関税ゼロの特別輸入枠を設定。最終的に重要五項目で三割の関税が撤廃される。

北海道の農業はたいへん厳しい状況に置かれている。国会決議で「聖域」とされた重要五農産物も関税の撤廃や引き下げが明らかになり、農業者は、一部を除いて離農の不安が広がるばかりだ。

北海道農業は、輪作体系によって成り立っている。農業王国と言われる十勝地方の畑作は、ビート（てん菜Ⅱ砂糖の原料）↓豆類↓ジャガイモ↓小麦と年ごとに違う作物を作る「四輪作」で成り立っている。甜菜のビートトップ（葉っぱ）は栄養分が豊富で、畑にすき込むと「地力」が高まり他の収穫量を増す。十勝にはビートを原料にする日本甜菜製糖（芽室町）、北海道糖業（本別町）、ホクレン（清水町）の三つの製糖工場があり、そのビート栽培がTPPの影響をもろに受ける。牛肉・豚肉も輸入関税が大幅引き下げられると十勝農業・酪農業は崩壊する。

北見・オホーツク地方では、小麦↓ジャガイモ↓ビートによる三輪作が一般的だ。TPP大筋合意では小麦は事実上の関税となっている輸入差益（マークアップ）が四五%削減される。その差益を財源とする補助金が減額されると、小麦が作れなくなる輪作体系が崩れる。

南空知地方は減反政策でコメから麦への「転作」（九市町村の転嫁率五六% 二〇一四年）が進み、いまや「麦どころ」。政府は国策に協力してきた小麦農家を苦しめようとしている。

食の安全も 北海道農民連盟（石川純雄委員長）は、「TPP断固反対！ 批准阻止！」を訴え三月二四日、札幌市中心部で二〇〇人がデモ行進した。道農連は「政府の試算は（影響を）過小評価している」「TPPは農業だけでなく、医療、保険、雇用、食の安全など国民生活に大きな影響を与える」と政府に対し、協定の全容公開や実態に即した影響分析を求めている。

同日、JA北海道中央会や道医師会の「TPPから北海道民の命と暮らしを守るためのシンポジウム」には約四〇〇人が参加、協定の問題点「日本で使用が認められていない食品添加物」など食の安全が脅かされることが明らかにされた。

最近になってJA北海道の飛田稔章会長は、道（政府）が試算した「コメ影響ゼロ」に対し、「安い米が輸入されれば、コメの単価も必ず下がる」と言い出している。

今一度、反TPP、食・農・環境を守る闘いに立ち上がろう！

（佐野 周二）

マルクスと向坂逸郎と梅原猛

東京新聞の夕刊には哲学者・梅原猛さんが毎月登場する。

三月二八日は『漫談・マルクス経済学』と題して、かつて『マルクス・エンゲルス小伝』を書いた大内兵衛氏を批判している。しかしマルクス経済学の内容を批判できないらしく、マルクスとエンゲルスを殆ど知らないままマルクスの人格を否定する。「伝記作家E・H・カーは、マルクスは人間への深い憎悪を持ったユダヤ人であり、生粋のドイツ人企業家である人の好いエンゲルスを除いてはあらゆる友人に対して罵詈雑言を浴びせ、孤独にならざるを得ない借金王であったと論じている。」と。

数年前に出した拙著『確かな脱原発への道』の中では、梅原猛氏を次のように批判して、かなり丁寧に論述した。

「梅原氏が『マルクスの思想には科学技術文明への批判がまったくなかった』などというのは、マルクスをいかに理解していないかを告白している。

『体制的文化人』である梅原氏にとっては、資本主義以外の文明など考えられないのであろうが、マルクスこそは科学技術の資本主義的利用つまり今日の文明が、何をもたらすかを心行くまで説明しているのである。」

これを読んだ和氣誠さんから、大変面白い資料（コピー）をいただいた。

『変革の思想』とはどんな思想であるか、七〇年代の入り口に立って、読売新聞では夕刊文化欄の連載企画として各界の知識人、政党人二〇人に、一人三回のリレー論争を依頼した。第一回の石川達三に始まり、一人目が梅原猛であり、それを受けて一人目が向坂逸郎であった。いままで読んだことのない、興味深い資料である。

長いので途中をかなり省略しながら、今も新しい向坂の主張の要所を紹介したい。

「梅原猛さんの『哲学』によると、日蓮も相当に排他的であるが、マルクスはそれ以上である、ということである。

梅原さんは、カール・マルクスの『フョイエルバッハに関するテーゼ』の最後の一説に『哲学者たちは世界をたださまざまに解釈してきただけである。問題は、世界を変えることにあるというのに』という言葉を引きこられて、『この言葉は大変魅力的な言葉である。……青年は思う。そうだ、もう理論の段階は終わったのだ。あとはいは実践なのだ。そうして、青年たちは街頭に出て、あるいはデモに参加し、あるいは、政党活動をし、あるいは、日航機を乗っ取ったりする』といわれる。

『フョイエルバッハに関するテーゼ』の右の文句の中には、理論の段階は終わった、今や実践あるのみ、という思想を含んではない。革命的な理論なくして、革命的な行動はない、というのが、マルクスの一字一句から、その真の意味を学び取っていたレーニンの考えなのであった。また青年たちに、青年たちの任務が、まず学ぶことにある、ということをくり返しくり返しのべている。

マルクスたちは、したがって今日のマルクシストも、『もう理論の段階は終わった』などと少しも考えてはいない。今日までの社会発展の中から学び取って、社会発展の

法則を知ることができた。この法則が、社会の歴史の中で、どのような態様を示すかは、今日以後の社会から学び取る外に方法はない。……ただ、理論の問題として、マルクシズムとちがったことをいうのを、発展と間違えてはいけない。またマルクシズムを批判することを、必ずしも発展と考えてはいけない。間違った批判は間違いであるからである。」

「梅原さんによると、『矛盾、対立、闘争、憎悪』の今日の社会が、まるでマルクスの理論から生まれてきたようである。だから、この人類の悲劇をなくするには、『人類はいま、マルクス主義を超える思想をつくり出す必要に迫られているように思われる』という。いま世界には、マルクスを克服するために、いろいろの思想が生まれている。その亜流が、日本でも流行している。社会の現実には、ますます混乱をはなはだしくしている。腐敗、墮落、犯罪、新聞、週刊誌は、目をおおいたくなる記事にみちている。これがすべて一挙に人間の思想の変革によって消滅することはない。……」

思想が変われば社会が変わるのではない。社会が変われば、思想が変わるのである。思想は、社会の事実から始まっている。事実が矛盾しているから、矛盾の思想が生まれるのである。マルクシズムは、社会の矛盾と対立、闘争の事実から生まれたのである。この事実の中に生活する人類が、この矛盾、対立、闘争を自覚したのである。マルクシズムは、この自覚である。火事は半鐘からはじまったのではない。火事が起こったから半鐘がたたかれるのである。マルクスは半鐘が不要であるなどといったことはない。マルクスほどこいなる場合にも、理論の大事さを説いたものはない、同時にただ論議するだけの論議を無用視した人間も少ない。……」

哲学者が、現代社会の矛盾について論ずることを、マルクスは拒否しない。しかし、社会の病をどうしてなおすか、メスをどうとぎすますか、手術をどううまく施行するか、というような論議と、手術後のアフターケアについて考究し、最もいい条件のもとで手術を行う。着々と手術の準備をして行く。手術をするという前提のもとで、一切の準備を進めていくこと、等々が必要である。

そんなことを無視して、あいもかわらず、胃潰瘍と脳髓の働きということについて、くどくどと論じているものがあるとすれば、問題は手術するというところにあるのだよ、その準備をすることにあるのだよ、といたくなるマルクスの気持ちもわからんわけではない。マルクスの『フォイエルバッハに関するテーゼ』の最後の文面は、そのことを言っているのである。マルクスは、どこでも思想や哲学が不用であるなどとはいつていない。しかし現実には労働者階級とたたかっている独占資本と、それに率いられるブルジョアジーのお先棒をかついで、戦線の間をうろろする人間がいたら、時としてどちらかの鉄砲だまが、あたることがあってもいたし方はない。……」

日本の人口の〇・四パーセントほどの人間（資本家階級）だけが、人間の生活を奪うことができるようになっていく。それが今日の社会である。このいつ生活を奪われるかわからない人の勤労の成果が、利潤なのである。このような社会の仕組みが、利潤の方を人間の生命より重しとするのである。これは思想ではなく、社会の仕組みで

あり、事実なのである。」

「哲学者にとつては、マルクシストが排他的であることが気に入らぬらしい。梅原さんは、日蓮よりもマルクスのほうが排他的である、といわれる。なるほどマルクスはあのように力づよく論争し、あのように確信に満ちた本を書いている。しかしすべての論理は排他的である。哲学者に対してこういうことを言うのは、誠に失礼だが、ある立言をすることは、その立言を認めぬ一切のものを排除することである。そうでなければ、立言の意味はない。しかし、マルクスは、彼の力強い論理を認めぬ人と、あのように激しく論争したが、彼を個人的に憎む人はいなかった、とエンゲルスが言っている。エンゲルスもそういう人であつたらしい。たとえばプロイセンの保守主義的な学者ルドルフ・マイヤがエンゲルスの客間でよっぱらつて、『僕が一日ロンドンで、革命的共産主義者たちの間で、こんなに一杯機嫌になることをだれが予言できるか』とごきげんであつたということである。ロンドンのエンゲルスの客間には、プロイセンの参謀本部の将校までよろこんであそびにきた。

理論的にも実践的にも、排他的にものを言わないのは、相手にかえつて礼を失したことにならないだろうか。はつきり、確信をもつていうことは、排他的になる。」

「私は、わが国が独占資本を中心としたブルジョアジーの利益を守る国家形態にあることは、今日の民主主義憲法の下でも変わりはないと考える。したがつて、三千数百万にのぼる生産手段をもたない階級、つまり労働者階級は、いろいろの階層があるにしても、賃金労働者（俸給生活者も含む）であることに変わりはない。これをごまかすために、人々はいろいろなことをいうが、この対立が、今日の社会を基本的に構成している。この対立から、マルクスが『資本論』で明らかにした機構（メカニズム）が生ずる。変革とは、この対立機構を変えることである。これが今日の社会の変革である。人々が憂いとす『矛盾、対立、闘争、憎悪』はここに源を發する。

この『矛盾、対立、闘争、憎悪』のどちらかの側に立つことなくして、いかなる『変革の思想』もない。思想は、必ず、その根をここに持たなければならぬ。だから、マルクスは『問題は世界を変えることにあり』と『決つたのである。変革ということ、いいかえると歴史をつくるということが、決して思想を入れかえることにはない』と『決つたのである。それを『哲学者』がああでもない、こうでもない』と議論ばかりしているからである。」

「労働組合も社会主義政党も右傾化しているといわれる。その底には左傾化の逆流がある。この逆流を見ないでは、労働者の変革の本質はわからない。一九〇五年の後にも、ロシアの社会主義運動の中には、今日の日本に比較すべくもないような、反動時代があつた。しかし、左に流れる力が成長してくることもなくしては、一九一七年はなかつた。……やはり、若いマルクスは『理論が大衆をつかむと、物質的な力になる』と言っている。これが今日まで、私を導いてきた変革の思想なのである。」

梅原さんには、『資本論』とあわせて向坂の『マルクス伝』（新潮社版又は社会主義協会版）を味読なさることをお勧めしたい。

（原野人）

新刊紹介 『新幹線開発百年史』 『運転室の安全管理』
― 真実に裏打ちされた小説 ―

新幹線運転士の大先輩であり、永年国労組合員として苦楽を共にしてきた尊敬すべき方が人生集大成の本を執筆された。その新書は二冊で『新幹線開発百年史』と『東海道新幹線（運転室の安全管理）』を同時発行された。著者は「中村信雄」さん。

一九五八年四月一日国鉄に就職、一九九八年五月三〇日東海旅客株式会社を定年退職された「鉄道人」である。JR移行期には配属差別を経験されている。国労組合員一筋の方で、DDR（旧東ドイツ）をこよなく愛し、自ら独学でドイツ語を学び幾度となくドイツ鉄道に触れてきた勤勉でグローバルな大先輩です。

『新幹線開発百年史』の表紙には「運転士の目線から見た東海道新幹線完成までの軌跡」とある。第1章「新幹線前史―在来線の歴史」、第2章「東海道新幹線の歴史」、第3章「ヨーロッパの高速鉄道」となっています。

表紙に書かれている「運転士の目線」からではいるが、戦前、戦中、戦後の鉄道人の生き様、事件、事故、各線の歴史、各職場の出来事が具体的事実として鮮明に紹介されている。歴史を振り返るには最高の本である。また、当時の歴史を飾った鉄道車両が写真で各ページを飾っているのを見れば鉄道に興味がない人も惹きつけられる。新幹線開業当時の新幹線列車ダイヤ付属として付いているのを見れば鉄道マニアには手に取りたい一冊であることは間違いありません。

私は鉄道車両の知識もなく、鉄道ファン、マニアでもない「新幹線運転士」ですが、この本を読んで感じるのは、「鉄道専門誌」でなく「真実に裏打ちされた小説」として読むことができました。

著者はこの本で、「鉄道人を育てようとする姿勢が感じられない」と、現在のJRに警告を鳴らしている。未だに労働組合で差別し、若者には提案、QC、業務研究会、様々な行事の企画参加の強要など、本物の「鉄道員」を育てる社風が全く感じられない狭い感覚のJR幹部にぜひ読ませたい気持ちに駆られました。

二冊目は、『東海道新幹線（運転室の安全管理）』 二〇〇のトラブル事例との対峙はじめにこの項でこの本の紹介を著者は書いている。「国鉄時代の国労東京運転所分会には皆が日々の出来事を自由に書き、読むことができる『国労組合員連絡帳』が詰所に置かれていた。多くの情報を共有できる正に『インターネット東京運転所国労分会版』である」。この連絡帳に書かれた事故事例を綴ったもので、著者は「新幹線運転現場の貴重な歴史の記録であると共に教訓である」と書かれている。

新幹線に旅客として乗車されていると、何も考えずに「車窓」を楽しむのが唯一で、今はパソコンに集中しているサラリーマンをよく見かける。乗車している生きた新幹線で何が起きていたのか、また起きているのか、この本はそのことを具体的に知る貴重な本と言えます。（二冊の本は店頭販売されていません。問合わせ先 Ⅱ（株）成山堂書店まで連絡ください。電話 03-33357-5861）。（新幹線運転士 蓑輪泰臣）

価格 『新幹線開発百年史』 3200円、『東海道新幹線（運転室の安全管理）』 2400円

◇ 読者からのおたより ◇

返金不要 新潟では、今日が、上越市議選の告示日です。私は、地元の祭りがあるため、自治会役員一年生は、禁足令？で参加できないので、昨日、街頭での「戦争法廃止」統一署名後、ただ、ただ、ユニオンの「檄」を持って、候補の顔を見に出かけました。また、滝野さんには、先日、上越にてお話を伺うことができ、大変勉強になり、活動の力となりました。ありがとうございました。

さて、一〇月で「紙・メール配信」を止めるとのこと。長い間、大変だったと思います。書かれていました、「返金」ですが、もし、メール読者も対象でしたら、私としては、不要ですので。ホームページ更新も大変なことと思いますが、引き続きよろしく願います。(新潟市・高島 悟)

我が故郷の町も 「通信」No.1214号拝読。巻頭言を読み鉄道で栄えた我が故郷の町もシャッターを降ろした店舗が増加、日中も閑散としています。原野人氏の文章は大雨や台風時ばかりでなく、恒常的に流出し(流出させ)命の海を汚染し続けている、平気で嘘を言う。悲しい事です。発行体制の変更の件『通信』バックナンバーホームページ完成と。本当に、お疲れ様でした。一〇月

一五日号以降は、ホームページにアクセスし、社会通信を読ませて頂きます。(東京・兼子 千栄子)

疑問 巻末に発刊39年をもって発行体制を変え郵送とメール配信はやめるとのこと。個人的に頑張りを続けたことに深謝し、とりわけ郵送の大変な手間や誌代の管理(もちろん編集もですが)を考えればと本当にご苦労をおかけしてきたと思っております。ただ、ホームページ掲載ではどれだけの方がきちんとチェックし続けるのか疑問です。どうせつくるならこれまで通り誌代を払ってもメール配信をお願いしたいところです。(野田市議・おさなみ博邦)

原稿の原稿も感激 前号11ページ拝見し恐縮しております。原稿のご原稿も有難く感激しております。少しでも北海道新幹線の実情、ひどいものです。反故にされた駅を想像はしていましたが、この実情が、町村後の現選挙に反映されることを祈ります。

やりたい放題、暴力の限りを尽くす現政権をとりあえず打倒するため頑張ります。(柏・柳田 祥子)

少数者の連携こそが 最終ページの記事読みました。様々な困難のなかで、長い間の各地の闘いをつなぐ努力に心から感謝です。沖縄での経験からも、「少数者の連携こそが時代の精神をつくり出す」ことを考えさせられました。「社会通信」が果たしてきた役割からは遠く及びませんが、私自身も小さくともその一端を担えていけたらと思います。これからもよろしく願います。そして、ともに頑張りましょう。(埼玉県ふじみ野市・毛利 孝雄)

ゆうちょダイレクトは便利 ゆうちょダイレクトでパソコンから振り込みました。ゆうちょダイレクトは便利！手数料無料！(一か月五件まで)、頼まれもしないのに、宣伝してしまいました(笑)。11月からはホームページのみ、ということを知り、お二人、ご体調でも悪いのかなあ…と思っていたところです。超高齢化社会ですからねえ…ウチの母も、「どこか、施設に入れるしかないよねえ…、ホームの空きを待っていてもいつになるかわからないから、少々高くても民間のケア付き有料老人ホームに入れるか…」と、弟・妹と話し合っている…さて、どうなるか…(増田 都子)

感無量 パソコンから指定の金額振込みました。それにしても、創刊以来の読者として感無量。私はパソコンは使いこなしますが、やはり「紙派」、手に持てないと読んだという気がしません。しかし、滝野さんが考えた末のこと秋からはホームページを見ます。

当方 地域の「便利屋」として 困ったことがあると頼まれ事 多々。オモチャドクターと区立小中学校の校庭の植木の剪定ボランティアを中心に元気でいます。(東京・三木 信之介)

アナログ人間 私としてはアナログ人間なので、紙の方がシツクリきます。しかし、時代の流れです。今後もがんばってください。(北海道・千代 隆久)

紙版中止、残念 残金はカンパです。少額ですみません。紙版中止、残念です。(北有美)

郵送中止は残念 郵送中止は残念。でも、ころ合いかも。残金あれば返金不要。(新潟・相田 邦夫)

びわ湖一周デモが近づきました びわ湖一周デモが近づきました。本年5月4日〜8日、ござってご参加を！びわ湖一周デモは参加費無料。5月6日のみ車デモのため予約必要。宿泊は各自で。

プラカード・うちわ・風船・横断幕など自由にご持参ください。なくてもいいです。ご一緒に歩きましょう！一四五〇万人の近畿の水源 びわ湖と私たちの未来 子供もたちを守りましょう。

連絡先 (稲村 守) PCメール sinam2002@yahoo.co.jp 携帯電話 080-5713-8629
詳細は「高浜―関電本店リレーデモ」ブログ検索、本誌No.1213(四月一日発行)をご覧ください。